

## 中学校家庭科住居領域の指導内容について（その2）

- 教師の意見と生徒の学習要求の比較 -

○高橋久実 新井法子 湯川聰子（鳴門教育大学）

【目的】住居領域を生徒が生き生きと学習していくためには、領域内容の精選化、生徒が興味・関心を持つ教材の編成、指導法などを見直して見る必要があると思われる。前報に引き続き、教師側の意見を調査し、生徒の意向との比較を試みた。

【方法】調査対象地区は、都市群として横浜市、京都市、地方群として宮崎県、徳島県の4地区を選択した。調査は、地区内の全中学校の家庭科教員に対して郵送で行い、有効回収率は51%である。方法は、前報と同様に中学校指導内容として適するものに○印、不適当であるものに×印をつけてもらう形で、生徒に対する調査と同様の内容である。

【結果】教師、生徒共に支持しているのは、「健康な住まいづくり（通風・換気）」「地震に対する住宅の安全性」「整理整頓の工夫」「自分の考えた家の間取り」といった内容であった。教師に支持の多い項目としては、「ゴミの減量化と分別収集」「省エネルギー・省資源問題」「大気汚染」といった環境問題であり、他の項目も概ね学習指導要領に忠実な内容であった。反対に教師が指導内容としてふさわしくないとする項目は「子供の個室について」「インテリア関係」などであり、生徒が望む方向と全く相反する結果を示している。また教師が支持するゴミ問題に対して、生徒は学習したくないと考えており、こういった教師と生徒の意見のズレは、「住居」の授業効果に影響しているものと思われる。